

が吹っ飛んだことが今も脳裡に焼きついている。アングレン駅乗車直前に収容所裏山の亡き同僚の墓標に向かつて黙禱を捧げ、一路東方ナホトカへの車中の人となる。

四月三日、興安丸に乗船、四月二十五日舞鶴港に入港、五年間の捕虜生活の総決算をした。

郷里沖繩に帰り、外地引揚者協会に勤め昭和四十四年六月、サイパン島慰霊塔建立、更に翌四十五年一月、フィリピン群島ミンダナオ島に亡き邦人の慰霊塔を建立する。昭和五十七年七月から旧満州国竜江省方正県にある日本人公墓を毎年慰霊墓参を行い、亡き人々の冥福を祈っている。

思い出の記

静岡県 樋口 なつ

東京、深川で平和な家庭を持ち幸福な毎日を過ごしておりました処へ、知人・柏木さんより、満州の広大な地ハイラルで事業を始め忙しいので是非協力して欲しいと

の誘を受けました。私は寒さに弱い体質のため家族全員反対でしたが、主人は男としての度胸をして友情、そんな意味で单身、渡満いたしました。一年程立ち、友人の事業と離れ独立して多忙との事で、止むなく昭和十四年に渡満致しました。ハイラル二道街に夏は土建業、冬は材木運搬でした。国境に近いため、軍隊の町で外出の時は証明書が必要でした。日本人、満人、朝鮮人、蒙古人、白系ロシア人の五族協和の町でした。材木運搬は馬車、牛車、二百台から三百台とつらねて行くのです。牧夫の食糧と牛馬の食糧を積み込み、塩、トウピン等々、大体三台に一人の牧夫で満人がタツナを取って一か月一回位の往復です。奥地へと行くのでした。善良な人達でした。五月五日の節句の日には使用人の中の頭達が馬車で迎えに来られ、二人で訪れて次々と御馳走になってお祝を共に致したものです。五月二十日頃、解氷期となりますと、ハイラル河に流木拾いが行事でした。肌寒い季節シューバーを刃に付けて見物に出掛けました。流木拾いの技術も大変、材木を拾うどころか流水の中に吸い込まれ命を失う危険もある見事な景観でした。ハイラルの夏

は短く流木拾いの終わった後、六月頃より原野には一年中の花が咲き揃う一番解放された季節となります。夕陽の沈む頃、真赤な太陽が後方地平線に、とても大きい姿を見せます。何とも云えない素敵な光景でした。原野には牛、豚、ラクダの放牧風景、朝夕、蒙古人が長い竿を持って送り迎えしておりました。朝三時頃より太陽が昇り、夕方十時頃迄、太陽が顔を出しておりました。北滿の特長だったと思います。八月十五日頃から木の葉が青いまま散り始めます。其の頃より冬支度にと心忙しくなりました。十月は雪が降り始め、是れが来春迄は雪も降らず、雨は勿論降らず、只、目にチカチカするものが舞っておりました。北滿の地ハイラルの冬ごもりが始まります。屋外は凡べて氷り付いているのに生活は何んの不便も感じる事もなく従業員の善良さと一心一体と事業も順調に繁栄し毎日を不安もなく楽しく過ごした事、強い思い出となります。段々と事業も拡張し冬は軍隊用のスキー工場経営し繁忙さが増し幸運でした。その時、主人召集となりました。二十年五月十七日の事です。事業は多忙、主人は出征、此の時ばかりは困りましたが善良な親方

(注、満人)が親切に工場を指導して、私は顔を出す丈、それでも工場を続ける事が出来ました。あの頃、若さが主人の留居を守って行く決心が出来たし、平和な毎日でした。八月九日のソ連の開戦、思いもせぬ出来事に只々驚きました。開戦と同時に爆弾が降下されハイラルは危険と荷物より食糧よりお金をとリュックサックに札束を詰め込み東ハイラル迄、一列に並んで歩きました。恐ろしさの為、只、黙々として、やっとの事で汽車が着き、ジャラン屯の蒙古人学校に落ち付きましたが日本人が任んでいると爆撃があるのでと立退を迫られましたのでハイラル方面より負傷兵を乗せた列車が来ましたが、で便乗させて貰い、夜中ハルピンに向かい走りましたが、途中、共産軍の銃撃に逢い、日本人は山、川の合言葉で暗闇を必死の思いで逃げ出しました。翌朝、女子は炊き出し、おにぎりを兵隊さんと暗い不安の中で食べました。戦死者も出ました。犠牲となられた人達の冥福を祈りました。目の前での戦闘、恐ろしい事件でした。家を出て何日立ったのか、そして十五日の終戦も知らず只々ハルピンへと向かったのです。漸く着いたハルピンで終戦を

知り口惜さと恐ろしさで泣き合いました。力が一度に抜けてしまいました。兵隊さん達は襟を正下着を新しく着替えてソ連へ切り込むんだと叫び乍ら何処かへと走っておりました。一刻も早く南へ行きたく心はあせりました。が、思う様にはまいりません。千頭駅迄来たところ満人運転手が止めて困っていた時、駅長の好意で空家の満鉄寮に泊る事となり、十五日位共同生活を致しておりますましたところ鉱山の満人におそれ命からがら、コーリヤン畑に逃げ一夜を明しました。此の時も日本兵が犠牲となり、私達、婦女子を助けてくれました。手を合せ冥福を祈りました。翌朝アサノセメントの寮に落ち付く事になり、二十一年の元旦を迎え、お餅も付き、不安の中に、ささやかな元旦を祝う少しばかりの心のゆとりが出来ました。是れから日本人男子はソ連軍の使役と毎日無償奉仕です。占領した機械を解体して貨物列車迄運搬積込作業の重労働です。列車には毎日、沢山の日本兵捕虜の輸送で、汽車の窓から手を振っての別れでした。敗戦の経験のない私達、只、右往、左往するのみ。手を振っただけでソ連兵に見付かると怒られました。どんなに怒

られても毎日、胸を痛め乍ら手を振り、見送りました。千頭でも毎日、終りを告げました。鉱山を持っていた佐々田さんが、ここは危険と夜中、脱出をする事になり、夜中に貨物列車に乗り奉天へと向かいました。列車の中は凍り付いてシートで身をかくしても凍死するのではと、お互い励し合い乍ら夜明を待ち一睡もしない重い頭を抱え、ふらふらで奉天難民收容所へ行きました処、ここでは毎日、毎日大勢の人達が死んで行きますときき、驚き佐々田さんの昔の住居が鉄嶺にあるので漸くの事にここに落ち付く事になり不安も少なく生活をする事が出来ました。まだ寒さも厳しく石炭や食糧を求める事で大仕事でした。それより生活をどうして行くかと相談して大福餅屋を始める事となり空家社宅に住み付き、力の仕事は男、小豆、砂糖の買出し、全くの経験も無いのに野外での餅搗から大福をなれない手付きで名ばかりのお店へ並べて、それでもよく売れましたが、時に満人につばを付けられ意地悪もされました。私は下ごしらえの役目でした。毎日、多忙に大福屋、でも此の先、何日頃、日本に帰れるのか、むなしい毎日でした。四月、そろそろ雪

解も終り、暖い春の訪れも近い或る日、日本への引揚げが始まるとの話が伝わってきました。大世界の一同で喜び、故郷の話に花も咲きました。命からがら逃げ延びて来た私達、此の地、そして皆との別れも胸の奥に、じんとするものがありました。数少ない荷物をまとも奉奉天迄歩き汽車の人となりました。落付いた処は錦洲でした。それより、コロ島に向い此の地で暫く共同生活をして五月二十日頃と思います。愈々上船と決り税関を通る時、コウモリ傘の柄の先のガラス玉を宝石と感違ひして取り上げ、其の上リユックサックの中味迄も取出しての検査でした。岸壁に日の丸の貨物船、是れで故国日本に、ほんとうに帰えられる。此の間の感激、一年間の苦闘の生活が、すうっと飛んで仕舞った様でした。誰ともなくサラバ。ハイラルよ、さらば満州よと段々と声が大きくなり、涙で岸壁もかすみました。佐世保港の灯が近くなり、日本に帰って来たのだ、感激丈でした。三十五年前の思い出に冷静になった現在、憾しい第二の故郷、今一度あの地を踏んでみたい、おそらく夢の中のハイラルではないでしょう。

北支那での思い出

静岡県 前田 美恵子

遠い外地での思い出は、あまりにも多すぎて何から先にと迷うようございます。あこがれと希望と不安とを一杯にして大陸に渡ったのは主人は十三年、私は十四年でございました。……

満州国に入ってから第一印象は想像以上に広い広い大陸の荒野でした。汽車は一途にその中を走りつづけていました。……

だんだん夕暮近くになった頃、左の方を見渡すと、はるかかあなたに地平線が一本あるだけで草も木もありませんでした。右の方を見渡すと、これも遠いあなたの地平線に夕陽が静かに並んでゆくのをみた時は！まるで絵の様に美しく、ミレイの晩鐘を！そのものを見た様で、ただ呆然とみとれておりました。その時の夕陽が忘れられない思い出の一つです。北京から張家口に向う途中、汽